

## 【概要】

### ラフカディオ・ハーンの「柔術」

濱田 明

#### はじめに

ハーン来日後の最初の著作『知られざる日本の面影』(1894)が松江を中心に伝統的な日本をスケッチした作品であるのに対し、熊本での経験を主な題材とする *Out of the East ; Reveries and Studies in New Japan* 『東の国から』(1894)は副題が示すように新しい時代の日本を考察した作品である。今回扱う『東の国から』所収の「柔術」は、開国後、西洋列強の影響を強く受けた日本が、西洋の科学技術、軍事を導入しつつ、文化的、精神的独自性を保ち国力をつけたことを、相手の力を利用して倒す柔術によって説明したものである。「柔術」については、西洋人の読者に日本の成功の秘密を解き明かしたとの好意的な評価の一方、黄禍論に貢献したとの批判もある<sup>1)</sup>。

以下、「柔術」の執筆の経緯と嘉納治五郎に触れた後、「柔術」の内容を紹介し、最後にマルク・ロジェによる仏訳を取り上げたい。

#### 1 「柔術」の執筆の経緯と嘉納治五郎

丸山学によれば、「柔術」の起稿は1893年10月、脱稿は1894年6月<sup>2)</sup>。チェンバレン宛6月4日付の手紙にある安河内麻吉との会話が、「柔術」9章の大学生の会話として再現されていることが根拠とされている。9章に続く長文の付記は「柔術」のゲラ刷りに手を加えている際に執筆され、ほぼ同一の文章が『神戸クロニクル』1894年12月18日に記事として発表されている<sup>3)</sup>。

嘉納治五郎はハーンが第五高等中学校に赴任した際の校長であった。「柔術」では、力が強い生徒には相手の力を利用する柔術の技を学ばせるのが難しいと語る柔術の大師範としてハーンは嘉納を登場させ、注で柔術の歴史の著者として紹介している。タイトルを「柔術」と、嘉納が提唱した柔道としなかったのは、日本の伝統的な精神を説明するために歴史のある柔術のほうが適切だと判断したのではないか<sup>4)</sup>。

#### 2. 「柔術」1章から9章と追記

冒頭、ハーンは読者に高等中学校の木造の建物でどんな「学問」が教えられるか問い、それが柔術、「昔の侍が武器を持たずに、相手と戦った術<sup>5)</sup>」であると明かす。レスリングと違い、「敵の力こそ、敵を打ち倒す唯一の手段なのだ。つまり柔術が教えるものは、勝利をうるには、か

ならず相手の力のみ頼れ、ということなのだ」(p.187)と説く。ただしこの箇所以降、武術としての柔術への言及はない。そして2章で、まず日本の近代化を概観し、開国後25年間で西洋の工業、応用科学、経済、財政、法制を取り入れたことは認める一方、西洋の衣服、建築、宗教などは最終的に受け入れなかったとする。西洋文明が肯定的に採用されたことを認める箇所は簡略であり、3章以降へ向けての形式的な前提と考えられよう。

3章では30年前のアルバムを開き、和洋折衷の衣装をまとった日本人の姿を「醜く見苦しい」とし、対照的に武具甲冑姿の若者の絢爛たる美しさを讃える。4章では、今日、東京の街に洋服姿で歩く者はおらず、日本人は和服へ回帰して、「ふたたび和服を捨てるようなことは、断じてあるまいと思われる」(pp.199-200)と書く。5章では、開港場の風景を描写し、西洋風の建物が多くは建っているものの、風景全体の中では日本建築の存在感が優勢で、「どこの開港場でも、日本建築はりっぱに典型を示しているだけではなく、内地のどこの都会のよりも、むしろ毅然としているくらいである」(p.204)と指摘する。ハーンによれば、西洋風の建物が多き都市では、柔術の原理にもとづき、日本建築が西洋の建物の力を利用しその価値を高めていることになる。

「柔術」でハーンの筆に力が入るのは、日本人をキリスト教徒に改宗させようとする布教活動とその失敗について述べた6章である。失敗の原因は「宗教はある人種の生活の一部をなしており、全く異なった人種の倫理的・社会的経験によって、すなわち外国の宗教によって取って代わられることはない」(p.207)ためである。16世紀後半の布教の成功については、他の論者とは異なり、「むかしのイエズス会は、近代のいかなる伝道協会などよりも、ずっとよく日本人の深い感情的性格を理解していた」(p.211)として、明治時代の宣教師が日本を理解することなく、教会や学校の建造といった経済力に依拠した布教を行っていることを批判する。

6章と並び、「柔術」のなかで重要な位置を占めるのが、西洋列強との外交交渉を扱った7章である。不平等条約の改正は、相手と戦う柔術の比喩が最も当てはまるだけではなく、「柔術」執筆当時大きな外交問題であった。日英通商航海条約の締結(1894年7月16日)という形で獲得した英国に対する日本の外交的勝利は「かの青木案は、まさに外交における柔術の奥の手を示すものであった」(p.223)と形容される。

8章でハーンは天皇に対する忠義など、日本人の国民意識を讃える。しかし9章では、伝統的な道徳に従って国家の独立が維持できるか心配する大学生の発言を通して、日本人の国民意識を相対化する。この9章で「柔術」が完結していれば、作品の印象は大きく違っただろうが、前述したように9ページに及ぶ付記が続く。不平等条約改正を成し遂げ、日清戦争の勝利を確実にした日本について、ハーンはイタリックで「*Japan has won in her jiu-jitsu.*」と宣言する。そして1章で柔術を日本の侍の武術と表現したのに対し、柔術が中国で発明されたことを読者に告げる。それは柔術の起源自体より、国際的に弱い立場にある中国がいつの日

か勝利することを訴えようとするためであろう。また中国の相手が日本ではなく、中国を侵略してきた西洋諸国であるとする。付記の最後、ハーンは西洋人を巨大な恐竜に喩え、恐竜のように西洋人が滅亡してもその知恵を受け継いだ東洋人が生き残る未来を予想する。

このように、相手の力を利用し倒す柔術を西洋列強の影響下の日本に適用する記述から、付記では日本の勝利を出発点に、中国人を代表とする東洋人と西洋人の人種的な対立に論点が移動している。はじめに述べたように「柔術」が黄禍論に援用されるのは、「柔術」の中でもこの付記のような論法によると考えられる。

### 3 マルク・ロジェによるフランス語訳(1911)について

最後にマルク・ロジェによる仏訳(6)を紹介し、フランスにおける『東の国』と「柔術」の受容について触れておきたい。1890年代、ハーン作品は全訳ではなく、一部が雑誌に訳出される形が多かった。『東の国』の翻訳については以下の二点を指摘しておきたい。まず、「序文」で1895年のハーンの見識性を高く評価している点。「九州の学生とともに」「柔術」などにおいて、彼は注目すべき慧眼を示した。そこで彼は、未来を(我々にとっては既に過去であるが)、ハーンが高度に有する透徹した観察力を知らない者には驚きのような慧眼によって示したのだ。」(p.8)

「未来」とは、具体的には日露戦争の勝利を指すと考えてよいだろう。日本の勝利が西洋、特にロシアと軍事同盟を結んでいたフランスに与えた衝撃は大きかった。ハーンがフランスで読まれ言及されるようになったのも日露戦争前後である。他に指摘すべきは、原著では小さい活字の付記が仏訳では他と同じ大きさの活字となり、また9章と完全に独立し最後に付け加えられた形ではなく、10章として全体の結論のように置かれていることである。

ハーンが付記を書いた1894年末の時点では軍事的強国の姿を見せ始めたばかりの日本も、日露戦争を経て、1911年には国際舞台における存在感も大きくなり、フランス人読者の関心も高まっていた。その意味で、仏訳の「柔術」をより説得的で雄弁な作品としたのは、原著が出版された1895年以降の日本の歴史であるとも言えよう。

#### 注

(1) 好意的な評価としては、ポール・マーレイ(村井文夫訳)『ファンタスティック・ジャーニー』恒文社2000年p.314など。ハーンと黄禍論については、橋本順光「ラフカディオ・ハーンの時事批評と黄禍論」平川祐弘・牧野陽子編『講座小泉八雲 II ハーンの文学世界』新潮社2009年pp.543-559及び西成彦「ラフカディオ・ハーンの世紀末—黄禍論を超えて—」西川長夫・渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房1999年p.221-233などに詳しい。

- (2)丸山学『小泉八雲新考』講談社（講談社学術文庫）1996年 p.26.
- (3)ラフカディオ・ハーン（真貝義五郎編訳）『神戸クロニクル論説集』松陰女子学院大学短期大学学術研究会 1992年 pp.37-41.
- (4)東憲一「熊本における嘉納治五郎とラフカディオ・ハーン」『東京外国語大学論集』第51号 1995年 pp.187-202.
- (5) Lafcadio Hearn, *Out of the East : Reveries and Studies in New Japan*, Boston and New York : Houghton Mifflin Co., 1895, p,185. 引用にあたっては原文のページ数を記し、訳出にあたっては以下を参照した。平井呈一全訳『小泉八雲著作集第7巻東の国から・心』恒文社 1964.
- (6)Lafcadio Hearn, *La Lumière vient de l' Orient : essais de psychologie japonaise*, traduit de l' anglais par Marc Logé, Mercure de France, 1911. ハーンの受容については、以下を参照されたい。濱田明「20世紀初頭フランスにおけるハーンの受容」坂元昌樹他編『ハーンのまなさし』熊本出版文化会館 2012年 pp.133-152.